

渡辺淳一

くれなゐ

これなる

渡辺淳一

くれなる

一九七九年三月二五日 第一刷発行
一九七九年七月二五日 第七刷発行

定価 八八〇円

著者 渡辺淳一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
郵便番号 一〇一

出版部 二三〇一六三六一
電話 販売部 二三八一二七八一

印刷所 中央精版印刷株式会社
株式会社美松堂印刷所

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

目

次

病 行 春 風 冬 並 花 鬼
葉 春 芽 花 日 木 芯 火

251 217 178 147 114 79 44 7

鷄 朝 冷

頭 顏 夏

360 327 293

題 裝

字 画

閑 原

万 万
希 千
子 子

く
れ
な
る

鬼 火

木之内冬子が、生理の前後にかすかな異常を覚えはじめたのは、いまから三カ月前の六月の初めのころだった。

もともと一五五センチと小柄なうえに、四十キロそこそこの痩せっぽっちで、身体にあまり自信はなかったが、それでもこの数年、病氣らしい病氣はしなかった。たまに季節の変わり目などに、風邪をひいても、二、三日おとなしくしているとおさまる。

血圧が一〇〇前後の低血圧と、軽い貧血で、ときに眩暈を覚えることもあるが、それでどうということもない。

痩せてはいるが、さほど身体は弱いほうではないと、自分では思っていた。

それがこの数カ月、生理がやや長引く。

大体、冬子はこれまで、二十八日型の規則正しいほうで、期間も四日から、せいぜい五日間で終わる。

はじまる二、三日前から、腰のあたりの軽い怠さ^{だるさ}と、奥歯の疼きを覚えるが、それも仕事を休むほどのこともない。この状態は、二十代の初めから二十八歳のいままで、ほとんど変わることがなかった。

だがこの二、三カ月、生理が一週間から十日近く続き、それにつれて、腰のあたりに鈍い痛みもあった。

初めは、少し疲れたせいかと、あまり気にもかけなかったが、次の月も一向に変わらない。それどころかさらに期間が延びて、痛みもいくぶん強くなったようである。

九月の初めの生理は、十日も続き、冬子はいよいよ一日だけ仕事を休んでしまった。

どうしたのか心配だが、身体^{からだ}の秘密のことなので、他人にきくわけにもいかない。

無理をしたせい^{せい}か、とも思ってみるが、このところ、とくに仕事^{しごと}が忙しかったわけでもない。

この一年、冬子はずっと、朝十時ころ、参宮橋の家を出て、原宿のブティック「クロッシェ」へ向かう。

店は表参道の明治通りの手前なので、原宿の駅から歩いて五分とかならない。参宮橋からは一旦、小田急線で

代々木八幡に出て、そこから地下鉄で一目だから二十分もあれば行ける。

冬子の店は四階建てのビルの一階で、入口は一間幅だが、十坪ほどで縦に細長い。

もっともそのうち、帽子の店として、ショーウィンドーを出しているのは、手前の六坪だけで、奥の四坪はアトリエにして、帽子をつくっている。

店の名前の「クローシェ」というのも、丸型の短いつばの帽子の呼び名から、とったのである。

この店に、冬子は十時半に着くが、お手伝いの売り子と、製帽学院を出た女性も、ほぼ同じころにくる。

着いたところで扉を開け、ショーウィンドーを点検して、実際に店を開くのは十一時近くになる。

原宿の街が賑わいだすのは、昼近くからだから、それで充分間に合う。

十一時から八時まで店を開けているが、いくらか客がたてこむのは、夕方の一ときだけである。冬へ向かって、個人帽の注文が増えたとはいえ、このところとくに徹夜をしたわけでもない。

九月の初め、一日休んでから、冬子は病院に行くことに決めた。生理が長引くだけとはいえ、いつまでもこんな状態では不安である。

友人の母親で、生理が不順でおかしいといっているうちに、病院へ行ってみたら子宮癌で手遅れだった、という話をきいたこともある。

三十前で、まさかそんなこともないと思うが、万一ということもある。

どこの病院へ行こうか……。

冬子が考えて、まっ先に思いついたのは、代々木の明治通りから西へ百メートル入ったところにある明治クリニックであった。

冬子はそこで一度、中絶の手術を受けたことがある。すでに二年前で、そのときのことは、もうほとんど忘れてしまった。

もっともそれは、病院の電話番号とか、看護婦さんの名前などで、心に受けた傷まで消えたわけではない。消えていないからこそ、まっ先に、その病院の名前を思い出したともいえる。

冬子は少し億劫な気持ちをおさえながら、二年前の手帳をとり出してみた。

二年前の九月二十日のところに、〈明治クリニック〉と書かれ、電話番号の下に、〈Kと逢う〉と一行だけ記されている。

そのあと、三日間の空白がある。

その三日間は、冬子が眠りながら貴志のことを考えた時間である。

貴志祐一郎と別れたのは、その一カ月あとの十月であつた。

別れは冬子のほうから、いい出したことである。

貴志に妻があり、二人の子供がいる以上、いづれ別れるときがくることは、予測しなくてもなかつた。十四も年齢差があることも世間的には不自然だつた。

いづれ破局がくると思いながら、太学を出た二十二歳のときから、ずるずると四年間も続いていた。

四年目に、妊娠して中絶したのは、考えようによつては、貴志と別れる決心ができたということ、かえつてよかったのかもしれない。

中絶の辛さが、冬子に別れる踏んぎりをつけさせたとはいえる。それで一人で生きていこうという姿勢ができた。

もっともそう決心がつくまでは、ずいぶん苦しんだ。

しばらくは食事でも喉を通らず体重が四十キロを割り、肌がかさかさになった。別れを告げに行つて、貴志の前で喚き、罵り、最後には彼の頬まで打った。

このまま、別れるのなら死ぬのも同じだと、自殺することまで考えた。

どうしてあんな狂気になったのか、いま考えてみると不思議である。自分の身体からだのなかに、あれほど怒り、悲しむエネルギーがあつたことが信じられない。

いまならもつと落ち着いて、静かに別れていくことができそうに思う。男にも迷惑をかけず、黙つて去つていくこともできる。

相手の立場を、もう少し優しく考えてやることもできそうだが、それも二年間という年月の風化作用のせいかもしれない。

だがそれで、貴志とのつながりがぎれたわけではなかつた。

建築技師で、三田に事務所を持つてゐる貴志は、別れぎわに、「なにか欲しいものはないか」ときいた。

「なにもいりません」

冬子はきつぱりと断つたが、すでに一年前から、青山に持つてゐた帽子のアトリエは、貴志の援助のできたものである。

「アトリエも、そのまゝお返しします」

「そんなものを、いまさら君からとり上げようなどとは思つていない」

青山のマンションは一DKで千二百万円ほどしたものだが、そのうち八百万は貴志が出してくれた。

「お借りしたもののだけは、きちんとお返しします」

「それより、これからどうするのだ」

「どこか、新しいところに勤めます」

大学に行き、がてら製帽学院に通っていて、いつのまにか帽子をつくることのほうが本職になっていた。さしあたり製帽の技術があるから、食べていくのに困ることはなかった。

「無理をするのはよしたまえ」

「無理ではありません」

貴志の前では強がりを書いてみたが、いまだデパートや他人のアトリエで勤める気にはなれない。

考えた末、青山のマンションは売り、それに貯金のすべてと、銀行から五百万ほど借りて、原宿に新しい店の権利を買った。

四年間のうちにマンションは値上がりしていたし、貯金も二百万をこえていた。実家は横浜で小さな貿易商をやっていたから、頼めば多少の工面をしてくれたかもしれないが、貴志と一緒にになってからは、家出同然になっていた。

ともかく、貴志との思い出のある青山にいる気はなかった。

「お金は必ずお返ししますから、いまだ少し貸しておいて

ください」

「まだ、そんなことをいつているのか」

「いやです。お返しします」

冬子が頑張ると、貴志は「強情な女だ」といつて苦笑した。

冬子は、そんな余裕あり気な貴志に腹を立てていたが、同時に、そんな貴志に安堵し、甘えている部分もあった。

「困ったことがあったら、いいなさい」

「いいえ、なにもありません」

考えようによつては、四年間の恋の報酬が、原宿の新しい店だったともいえる。

それが高いか安いかは、冬子にもわからない。二十二歳から二十六歳までの、女の一番美しい年月を捧げた代償としては、安いかもしれない。だが、四年間も好きな人と一緒にいられた満足感からいえば、高すぎるかもしれない。

ともかく、それで貴志とのことは清算できたと思った。だが青山から原宿へ移り、新しい店を開いたところで、元をただせば貴志の援助でできたものである。貴志がいなかったら、いまの冬子はなかった。

そして、冬子の身体が貴志によつて目覚めさせられた

ことも、疑いのない事実である。

明治クリニックという名は、そのころの貴志との思い出とつながっている。そこへ行けば、いやでもかつての辛さが甦える。

二年前、その病院に行くことを決めたのは貴志であった。妊娠と知って、どこへ行こうかと迷ったとき、貴志が友人の医師の紹介だといって、その病院を決めてきた。

院長は四十半ばで、小肥りの口髭を生やした人だった。外見は怖そうに見えたが、話すと声が意外に優しくかった。

冬子が貴志の友人の紹介状を持っていくと、医師は冬子と紹介状を交互に見くらべてうなずいた。

それから二年の歳月が経っている。

いま突然行っても、院長は冬子のことを憶えているかどうかかわからない。

中絶したといっても、一日何件もあるのでは憶えていろ、というほうが無理かもしれない。

もう一度貴志に頼んでみようか、そう思いながら冬子は頼むことに戸惑っていた。

二年前に別れてから、貴志とは店の開店のとき、花束

を贈ってくれ、そのあと逢ったただだった。多勢の来客が詰めかけているなかだったので、ゆっくり話す暇はなかったが、態度は前と変わらなかった。

相変わらず無造作ななかに、建築家らしいおしやれを秘めて、「頑張りなさい」といっただけだった。

冬子は一瞬の懐しさをおさえて、「ありがとう」と一言だけ、突き放すようにいった。

それ以後、何度か電話で話したことがあるが、いつも貴志のほうからかかってきた。

冬子が出ると、貴志は「どうかな」と、いうのが口癖だった。

「なんとかやっています」

「そうか、それならいい」

貴志はそれだけいうと、気候のことや新しい仕事のことなど、とりとめのないことを五、六分話して電話をきる。

初めのうち、冬子は、別れた女に電話をよこすのはやめて欲しい、といおうかと思ったが、声をきいているうちにそんな気持ちは失せた。淡々と事務的な受け答えをしながら、その実、安らぎも覚える。

一カ月に一度くらいの電話だが、冬子のなかに、貴志の電話を待っている気持ちもあった。

そのまま、二年近い歳月が経っていた。

いま、こちらから電話をかけることは、これまでの受身一方の状態をこわすことになる。静かにおさえた関係が乱れることになる。

だが、用件は純粹に病氣のことである。

別れたとはいえ、友人であることに変わりはないのだから、こちらから電話をかけたところで問題はない。

冬子はそこまで考えて受話器をとった。

かつては毎日のようにかけたナンバーが、記憶の底からゆっくりと甦えってくる。

二年という歳月の風化が、あるところでは急で、あるところでは遅い。

病院を紹介してもらっただけだわ……。

冬子は自分にいきかせながら、それが生理につながる、他人にはいえぬ秘密であることを忘れていた。

昼を少し過ぎた時間だったが、貴志は事務所にいた。

「どうした」

突然で驚くかと思ったが、貴志の声はいつもと変わらなかった。

「この前行った代々木の病院ですけど、また紹介していただけないでしょうか」

冬子はつとめて平静な声でいった。店は女の子がいる

ので、公衆電話からかけたが、それがかえって冬子を落着かせていた。

「なにかあったのか」

「たいしたことはないのですが、ちょっと」

冬子はガラスのボックスから遠くに目をやった。表参道には昼の散策を楽しむOL達があふれていた。

「君が行くのだね」

「ええ」

うなずきながら、冬子はこんなことで、貴志に電話をかけたのは、少しおかしいかもしれないと思った。

「急ぐのか？」

「それでもありませんが」

「今日、これから大阪へ行く。明後日帰るが、それからでもいいかな」

「かまいません」

「じゃあ二、三日待ってくれ」

貴志は余計なことをきかない男だった。それだけこういうときは気が楽だが、逆に物足りなさも覚える。

「大阪はなんのお仕事ですか？」

「中之島に新しく建つビルの設計を頼まれている。紹介状をもらえたらすぐ君のところへ送るようにする」

「お願いします」

冬子はボックスを出ると、表参道を並木に沿って歩き、店へ戻った。

店には二人の客がいた。一人は通りがかりの人のようだが、もう一人は中山夫人であった。

夫人はもう数年来の冬子の顧客で家が原宿に近いせいか、よく現われる。もう四十をこしているが面長で、帽子がよく似合う。

「できたそうね」

「ご免なさい、ちょっと出かけていて」

冬子は急いでアトリエの奥から、夫人に頼まれていた帽子をとり出した。キャノチエで、いわゆるストロー製のカンカン帽である。クラウンが角ばり、水平のブリムの根元に小さな花の輪をそえてある。シックな大人のムードのなかに華やかさをだしていた。

「なるほど」

夫人は帽子をかぶると、鏡に前、横、うしろと映してから、

「どう、若過ぎやしない？」

「花が小さいから、かえって落ち着いて引き立ちます。とっても素敵ですわ」

「そういえば、わりと似合うわね」

夫人は納得したらしい。何度もうなずいてから、

「よかったわ、これでなんとか間に合いそうだわ」

「いつですか」

「二十二日の午後なの」

夫人の夫は、T大の工学部の教授で、九月の末に京都で国際会議が開かれる。夫人はそのパーティに出席するために帽子をあつらえたのである。

「ねえ、ちょっとコーヒードロームかい」

中山夫人が帽子をカウンターに戻しながらいった。このところ店にくると、夫人は決まって冬子をコーヒードロームに誘う。

一人っ子がすでに高校生で、夫人は暇なのだろうが、冬子は結構忙しい。

今日は出たくないと思う日もあるが、顧客であれば断わるわけにもいかない。

二人は店から二つ先のビルにある「ミモザ館」という喫茶店に行った。ここは従業員が五名とも若い男の子で、夫人は気に入っているらしい。

「冬子さん、少し顔色が悪いんじゃない」

「そうでしょうか」

冬子はそつと頬に手を当ててみた。

生理は二日前にようやく終わったが、まだ腰のあたりに気怠さが残っている。

「そんな細い身体からだで、無理をしちゃ駄目よ」

「別に、無理はしていませんから、大丈夫です」

夫人はうなずき、コーヒーをかきまぜてから、

「そういえば、この前、貴志さんに会ったわ」

貴志は、夫人の夫の中山教授と友人で、夫人を紹介してくれたのも貴志であった。

「ホテルオークラで、なにかパーティーがあつた帰りらしかったけど、相変わらず女性に囲まれて、楽しそうだったわ」

夫人はそういつてから、急に気がついたように「ご免なさい」といった。

冬子と貴志のことを、夫人はどれくらい知っているのか。かつて二人が好意を抱き合つたことがある、という程度で、青山のマンションに一緒にいたことまでは気がついていないと思う。

「あんなに才能があれば、もてるのも当然よね」

夫人はいいわけのようにいつてから、

「でも、貴志さんっておかしいわ。まわりに女性達がいるのに、わたしに、これから一緒に飲みに行きませんか、なんて誘うのよ。もちろんわたしはお断わりしたけど」

夫人は悪戯っぽく笑いながら、冬子の反応を見ている

ようでもある。

「このごろ、貴志さん、お店にはみえないのですか」

「いいえ、全然……」

「お忙しい方だから、今度またヨーロッパに行くんですって？」

「そうですか」

「なにか、九月か十月ごろとか、主人がいつていたようにだけ」

その話を冬子はまだきいていない。実際行くとしても、それはもう冬子には関係ないことである。

「男の人はいいわ、四十二で、まだ男ざかりなのだから」

四十二は貴志の年齢だった。夫人はその一つ下の四十一だが、結構華やいている。

「今度、一度貴志さんも呼んで一緒に食事しない？」

「ええ」

冬子はうなずきながら、また下腹から腰にかけての鈍い痛みを感じていた。

貴志からの紹介状が届いたのは、それから三日後の夕方であった。

五時を過ぎて、通りがオフィス帰りのOL達で賑わう